偶人物語

田中貢太郎

古道具屋の大井金五郎は、古道具の入った大きな風呂敷包を背にして金町の家へ帰って来た。金五郎は三河島蓮田の古道具屋小林文平の立場（たてば）へ往って、古い偶形（にんぎょう）を買って来た処（ところ）であった。

門口の狭い店にはもう電灯が点いて、女房は穴倉の奥のような座敷で夕飯の準備（したく）をしていた。

「帰ったのですか、寒かったでしょう」

「平生（いつも）だったら、寒いだろうが、今日は寒くねえのだ」

女房は金五郎の活活した顔を見た。

「どうしたの、今日は痴（ばか）に景気がいいじゃないの、何か掘りだし物でもあったのかい」

「あったとも」風呂敷の結目を解いて包を背からおろして、「おい、みろ」

金五郎は包の中から三つの古い桐の箱を執(と)りだした。女房も好奇心をそそられたので傍へ寄って来た。金五郎は女房の顔を見て莞(に)やりとした。

「おい、妬(や)くな、大変な品物(しろもの)だぞ」

「妬く、何を妬くの」

「見ろ」

金五郎はその一つの蓋を開けた。中には女の偶人の頭が入っていた。それは二十六七に見える女で、髪を勝山髷(まげ)にして紫の手柄をかけていた。金五郎はその偶

人を二十五両で競(せ)り落として得意になっているところであった。

「おや、まあ、まるで生きてるようだね、鬼魅(きみ)が悪いじゃないの」

「だからよ、これで良い正月をしようと云うのだ、どうだ、鬼怒川(きぬがわ)温泉へでも伴(つ)れてってやろうか」

「鬼怒川はいいね」

金五郎はそこで更(あらた)めて偶人の顔を見た。と、その偶人の眼が動いて淋しそうに笑った。

「わッ」

金五郎は後へ仰(の)けぞったが、直ぐ跳ね起きて外へ走

り出た。

「生きてる、生きてる」

その偶人は頭と胴と手足の三つに分けて、箱に入れてあったが、合わせると五尺二三寸の脊丈（せたけ）になるのであった。金五郎はその時から狂人のようになって、夜も昼も暴れまわった。

金五郎の女房は、鬼魅の悪い偶人を一刻も早く始末をしたいと思ったが、同儕（なかま）にはもうその噂が弘まっているので、何人（たれ）も買おうと云う者がなかった。女房はしかたなしに人を頼んで、荒川へ持って往って流してもらったが、箱は投げこんだ処へ鐘（おもり）を附（つ）けたように

浮かんだままで流れなかった。箱を流しに往った者は、忌いましいので竹竿で突いて流そうとしたが、突いた時はすこし流れるが、直ぐ又元の処へ戻って来た。

もてあました女房は、町屋の火葬場の前にある地蔵院へ往って、理由を話してそこへ封じこめてもらう事にした。地蔵院の住職森徹信は、仔細にその偶人を調べて見た。偶人の箱に古風な筆蹟で小式部と書いてあった。そこで住職は小林文平に就いて調べたところで、これは同じ町屋の林田雪次郎と云う老人の家から出た事が判った。

住職は林田老人の許へ往って偶人の来歴を聞いた。

それによると文化年間、吉原の橋本楼に小式部太夫と云う妓（おんな）がいて、それに三人の武士が深い執着をもって、主家を浪浪するもかまわず、通いつめて自分の有（もの）にしようとした。小式部はいろいろと考えた結果（あげく）、自分の生き姿の偶人を三体造らしてそれぞれ送る事にした。

小式部の依頼を受けた人形師は、その翌日から小式部の許へ通って、小式部の顔を見ながら、偶人を作ったが、小式部はその半ば比（ごろ）から病気でもないのに窶（やつ）れだして、いよいよ完成と云う日になって呼吸を引きとった。そして、その偶人は遺言によって、三人の武士に贈られたが、その一つが林田老人の知りあいの熊

本の武士へ往き、それを後に林田老人が譲り受けたものであった。林田老人は熊本の武士が、その偶人の髪を結うてやる処を時どき見たと云った。

底本：「伝奇ノ匣6　田中貢太郎日本怪談事典」学研M文庫、学習研究社
　　２００３（平成15）年10月22日初版発行
底本の親本：「新怪談集　実話篇」改造社
１９３８（昭和13）年
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
２０１０年10月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(http://www.aozora.gr.jp/)で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。